



第1編2章2

近代的人間像の誕生(2)

pp.34～35

ベーコン・デカルト

「知は力なり」

人間の知と力は一つに合する。原因が知られなくては結果は生じないからである。というのは、自然は服従することによってでなくては征服されないのであって、考察において原因にあたるものは、制作においては規則である。

(ベーコン、坂本賢三編『ノヴム-オルガヌム』「人類の知的遺産」講談社)

帰納法

真理を探究し発見するのは二つの道があり、またありうる。一つは感覚と個別的なものから最も一般的な命題に飛躍し、これらの一般的命題とその不動の真理性から判断して中間的命題を発見する。この道がいま用いられている。他の一つは感覚と個別的なものから一步一步段階的に上昇して命題を引き出し、最後に最も一般的な命題に到達する。この道が真の道であるが、まだ試みられたことはない。

(ベーコン、坂本賢三編『ノヴム-オルガヌム』「人類の知的遺産」講談社)

「我思う、故(ゆえ)に我あり」

我々が眠っているときにも、さめているときにもつと同じすべての思想があらわれてくるが、その場合には、それらのどれも真実の思想であるとはいわれないということを考えて、私は、それまでに自分の精神の中に入りこんでいたすべてのことがらを、夢の中の幻想(げんそう)と同じように、真実ではない、と仮定しようと決心した。

しかし、そのあとですぐ私は、次のことに気がついた。それは、すなわち、このようにすべてのものを虚偽(きょぎ)と考えようと欲していた間にも、そう考えている「私」は、どうしても何ものかでなければならないということであった。

そして「我思う、故に我あり」というこの真理は、懐疑(かいぎ)論者のどんなにとほうもない仮定といえども、それを動揺させることができないほど、堅固で確実なのを見て、私はこの真理を、自分が探求しつつあった哲学の第一原理として、何の懸念もなく受け入れることができると判断した。(デカルト、野田又夫訳『方法序説』「世界の名著」中央公論社)